

今月は創立100周年を迎えた大槌高校より、生徒の学校生活や日々の様子を拡大版でお届けします！

大槌高校「Next Stage」への思い新たに 創立100周年記念行事

#全校行事

創立記念式典

6月29日(土)に大槌高校創立100周年記念式典が挙行されました。「Next Stage～誇り高き100年の輝きを未来へ～」のスローガンのもと、これまでに培ってきた大槌高校の伝統を受け継ぎ、次なる100年に向けた魅力ある学校づくりへの思いを新たにしました。



瀬戸和彦校長式辞



菅野雅也生徒会長の生徒代表挨拶

記念講演会

創立記念式典後に記念講演会を開催しました。「地域の未来に向けて～ラグビーW杯釜石大会成功へ～」という演題で、釜石シーウェイブスRFCゼネラルマネージャーの桜庭吉彦氏にお話しいただき、スポーツを通じた地域活性について考える機会をいただきました。



桜庭吉彦氏

芸術鑑賞会

6月25日(火)に記念芸術鑑賞会を行いました。大槌高校からは全校生徒が参加し、劇団わらび座のミュージカル「KINJIRO!」を鑑賞しました。大槌学園・吉里吉里学園の7～9年生も参加し、町内の中高生全員で迫力ある舞台を楽しみました。



優勝目指していざ勝負! クラスマッチ

#全校行事

6月20日(木)・21日(金)の2日間に渡って、毎年恒例行事である「クラスマッチ」が行われました。1～3年生の計6クラスが、長縄跳び・バスケットボール・ドッジボール・サッカー・バドミントン・バレーボール・リレーの7種目で競いました。各クラスで制作したオリジナルのTシャツに身を包み、学年をこえたクラス対抗戦に火花を散らしました。総合優勝は3年B組、2位は3年A組、3位は2年B組でした。すべてのクラスが一致団結した熱気溢れる大会となりました。



震災の記憶を次世代へ伝える 防災紙芝居

#復興研究会

復興研究会に所属する生徒により、自分自身の被災体験を紙芝居にして震災の記憶を伝える「防災紙芝居」の製作が行われています。6月15日(土)に開催された震災の記憶を伝えるシンポジウムにて、完成したての防災紙芝居を初めて発表しました。製作の中心となった2年生の生徒は、「震災の当時、自分たちは小学校2年生だった。だから防災紙芝居はかつての自分たちと同じ小学生たちにも伝えていきたい」と語り、今後の活動に意気込みを見せていました。



特集 探究活動「三陸みらい探究」

大槌高校では本年度より、大槌町の復興やその先のまちづくりを担うリーダーを育てる取り組みとして、地域社会の課題を知り解決する方法を考える授業「三陸みらい探究」を新たにスタートしました。

先輩たちのチャレンジから自分の未来を考える 大槌発! 未来塾

#1・2学年

7月5日(金)に、多様な年代の人々との交流によって今後の進路・生き方を考える授業「大槌発! 未来塾」を開催しました。今回は「私の人生とチャレンジ」というテーマのもと、町内外でチャレンジを続ける社会人と大槌高校出身の大学生を招いて、高校時代の過ごし方や仕事を通じたチャレンジについてお話しいただきました。生徒たちからは「大槌ではできないことがあるという考え方ではなく、大槌でも自分からチャレンジをすれば夢を叶えられるようになる」という感想が述べられるなど、卒業後の進路を考えていく上で貴重な機会となりました。

《「大槌発! 未来塾」講師一覧(敬称略)》

FLOWER DRESS	兼澤悟	NPO e-education	税所篤快
株式会社山岸産業	山岸千鶴子	大手広告会社	住吉翔太
一般社団法人 Tsubomi	大久保彩乃	大手エンタメ会社	三原脩平
株式会社鈴藤商店	兼澤幸男	岩手県立大学 4年	前川美里
一頁堂書店	木村薫	東洋大学 4年	高木桜子



生徒たちは小グループに分かれて講師のお話を聞きました

高校生が中学生に語る 自分プレゼン発表会

#1学年

1年生では「語ることを通じた自己理解」をテーマに、「私を変えた出会い」「私に勇気をくれたもの」などのテーマに沿って自分のことを発表する「自分プレゼン」を制作しました。6月19日(水)には大槌学園と吉里吉里学園の9年生に対しての発表会を行いました。はじめは発表をすることに緊張していた生徒も、自分のことを他人に伝えるという経験を通して自分自身に対する理解を深めることができました。今後の授業では今回の発表内容をポスターにまとめ、文化祭等で掲示を行う予定です。



大槌町の課題を知ろう! まちづくりワークショップ

#2学年

2年生では地域社会の出来事に対する関心を高めることを目的に、まちづくりを体験するワークショップを実施しました。20年後・30年後の大槌町に必要な取り組みや目指したいまちのコンセプトを話し合いました。生徒からは「まちづくりの取り組みによって何が変わるのか気づけるようになりたい」「高校生と大人が協力して話し合えば、新しい気づきが生まれると思う」といった声があり、まちに対するそれぞれの思いが語られる場となりました。

